

# 産学官の連携で土砂災害警戒情報の高度化を目指す!

会社と大学の「二足のわらじ」を履く

ボー・ジャクソンという、メジャーリーガーでアメリカンフットボールだった男がいた。メジャーのシーズン中はクラブとバットをかかえ、その重厚な装いに身をつんだ。彼はアメリカのプロスポーツ史上初めて「二足のわらじ」を履いたプレーヤーで、両方の舞台で同時に活躍していたところは相当な話題になっていたと記憶している。

「会社勤務をしながら博士号取得に向けて勉強中の人間がいる」。今回の取材は、篠崎さんの同僚からそんな話を聞いたことが発端だった。これを聞いてすぐさま「二足のわらじ」という言葉を思い出し(言葉の厳密な意味では異なるが)、冒頭のボー・ジャクソンが出ていたナイキの広告とコピーがふいに頭に浮かんだ。そのひそみに做えば、篠崎さんはおよそ「Shino Knows Business, Shino Knows Research.」(※)といったものではないか——この業界ではそれほど珍しいことではないのかも知れないが、これ以上の情報もほどほどに、篠崎さんの勤務先に向かうことになった。

博士号をとって初めてスタート地点に立つ

篠崎さんは、山口大学大学院において土砂災害発生危険度に関わる統計解析の研究で工学修士号を取得したのち、平成12年4月に大日本コンサルタント株式会社に入社した。そして、7年半ほど砂防に関する調査、計画や設計などの業務に携わると、平成19年10月から平成21年3月にかけてもう一度山口大学大学院の門をくぐることになる。ここでは、博士課程に身を置きさらに助教の立場で研究を掘り下げることと合わせ、学生の指導にもあたった。今は再び大日本コンサルタント株式会社に戻り、業務を複数担当しながら博士論文の仕上げに勤しむ日々を過ごしている。

このように忙しく過ごす篠崎さんは、学部で2~3年生のころにはすでに建設コンサルタントで働きたいと考えていたという。一方、研究活動で得られる知見は必ず将来の役に立つだろうと、大学院進学も視野に入れていた。「広島で6・29災害があったときにちょうど学部4年生で、隣県なのでコンサルタントのアルバイトで被災地調査をしました。そのときに、なんとなくコンサルタントの姿が見えて、やっぱりこのように忙しく過ごす篠崎さんは、学部の2~3年生のころにはすでに建設コンサルタントで働きたいと考えていたという。一方、研究活動で得られる知見は必ず将来の役に立つだろうと、大学院進学も視野に入れていた。「広島で6・29災害があったときにちょうど学部4年生で、隣県なのでコンサルタントのアルバイトで被災地調査をしました。そのときに、なんとなくコンサルタントの姿が見えて、やっぱりこ



しのぎつぐひろ  
篠崎嗣浩さん  
大日本コンサルタント株式会社  
東京支社 河川砂防技術部

の仕事に就きたいと感じました。そして、であればこそ、会社に入ってからの実務とは異なる研究も、個性を伸ばす意味でもっとしておく必要があると判断して修士課程に進むことにしました」。

広島での体験を通じて歩むべき方向性が見えてきた、ということだろう。6・29災害といえば、土砂災害防止法の契機となった災害である。篠崎さんが今、会社員として研究者として取り組んでいるのは、まさにソフト対策で扱う情報を進化(深化)させてゆくというもの。これと思うと、何とも因縁深いものがあるのではないだろうか。「でも今はまだ半人前です。博士号をとって初めて技術者としてスタート地点に立つのです。会社のためとなるのも、それからです。慎重な言葉ですが、ここには自身の技術者としての将来を見据えた、熱い思いが存分に込められていた。

土砂災害の発生危険度情報をよりわかりやすく 平成17年、準備の整った都道府県から順に土砂災害警戒情報の運用が開始された。篠崎さんの会社での実務と研究は、これ以降その動向と用例もちらほらあるようだが、今後さらにニーズが増すサービスであることは確実だろう。

## 産学官の連携をさらに強めたい

民間のコンサルタント企業の一員として、クライアントの殆どが行政である。そして、その精神においても現実においても学術の何たるかを知り、重要性を認識している。そんな篠崎さんは、砂防の未来のためにもますます産学官の連携を強化すべきだと考えている。「砂防技術、もっと言えば土木技術の発展には、連携や交流が大切だと感じています。特に学識経験者を加えた交流は高度な専門技術に加え、民間的な視点からの意見も吸い上げることができると、技術だけではなく説明責任の向上を図るうえでも非常に重要であると考えています」。砂防への社会的信用を保ち続けるため、また篠崎さん自身のため、これからの時代にはますます技術交流が不可欠という思いだろう。

篠崎さんは学部生時代、「洞穴研究会」なるものに所属していた。これは全国でも非常に数少ない不思議な研究会で、秋吉台を擁する山口県ならではの存在だそう。洞穴を探し出しては暗闇めがけて入り込んでいく面々は、アウトドア的な楽しみからであったり理学的な関心からであったりするそうだが、篠崎さんは「いかに危険を回避しながら効率的に昇降できるか」に一番重きを置いていたという。このあたりの性格が、現在の篠崎さんを在らしめている仕事や研究の、様々な意味での「らしさ」だと思えるのだ。(取材・文/編集部)

洞穴研究会時代の篠崎さん



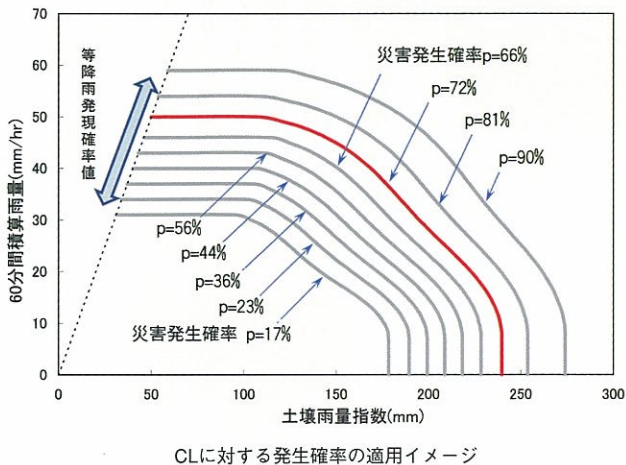
学生の指導にあたる篠崎さん



会社に入ったばかりの頃の調査風景

運動することになり、目下、土砂災害の発生確率やCL(土砂災害警戒避難基準雨量)の超過確率をより詳細にはじき出す解析に向かっている。これをごく簡単になぞると、現状のシステムはCLを超えない限り危険性が掌握できず、しかもその度合いをはかるレベルの表現も少ないというのだが、篠崎さんが取り組む技術は、この現状のシステムを援用して降雨のみを対象

としつつ、CLを超えるか超えないかに関わらずに時間ごとの危険性の度合い、つまり土砂災害の発生する確率を細かく数値化してゆく、というものである。天気予報での降水確率を想起するとわかりやすいかもしれない。この技術が発展すれば、例えばテレビなどで「今後の土砂災害発生確率は77%でしょう。現在、土砂災害が起こりやすい危険な状態となっています」などと数値的な情報も含めてレポートすることも可能となるという。客観的な数字が身に迫るようになり、行政も情報を出すタイミングを今以上に掴みやすくなる。部分的な採



(※) ボー・ジャクソンの場合は「Bo Knows Baseball, Bo Knows Football.」